

原爆文学研究会報

第四九号

原爆文学研究会 二〇一六年三月

「八紘一字」の塔と、負の遺産 宮崎市に引越しをして、一年が経とうとしています。初めて宮崎に来た時に、遠くの方に、「塔」が見えました。「八紘一字」の塔でした。昨年八月に、「八紘一字」を考える会の方々の解説のもと、散策する機会を得ました。塔は、近くから見ると、見上げるほどに大きい。当日は三五度近くまで気温が上がり、遮るものがほとんどない塔周辺は、太陽がじりじりと照りつけていました。

塔は、いくつもの「石」が積み重なってできています。それらの石は、一九四〇年に皇紀二六〇〇年を記念して、当時の内地や、植民地だった国々から贈られたものでした。各地域、各国の「善意」のもとに贈られたとされていますが、実際は強制されたものだと言われています。例えば、中国の「万里の長城」の石など、その国にとって貴重な文化財から供給されたものもあります。植民地にとって貴重なものであればあるほど、宗主国への忠実が示されています。解説を伺い、石に触れながら「八紘一字」の塔もまた、この国の負の遺産であると感じました。塔の内部も興味深いものです。掲げられていたレリーフからは、靖国神社参道のレリーフが想起されます。塔の方がより神話性の高いものですが、大日本帝国の戦力を描いている点は共通していると感じます。

戦後、塔は、「平和の塔」と名前が変わります。改名には様々な考えがあったようですが、石が戦時下に植民地から供給されたことの本当の意味が、「平和の塔」という当たり障りのない名称によって隠ぺいされ

ているように感じました。「八紘一字」の塔を考える会は、あえて、この名称を掲げ、考え続けています。

七月、ユネスコは、明治日本の産業革命遺産の世界文化遺産登録を決定しました。そのなかには、端島炭鉱（「軍艦島」）や長崎造船所など、微用が行われた遺産も含まれています。そのため、登録に際して、主に韓国との「調整」が行われたことが報道されました。遺産は、日本の近代化の歴史を示す資料であるという点でたいへん貴重なものです。同時に、近代化は、多くの労働力が供給されなければ成し遂げられません。遺産には二つの側面があり、この二つは、正反対の要素のようにみえて、分離することができません。

負の遺産と私たちが向き合う際に、「八紘一字」の塔は多くの示唆を与えてくれます。一つ一つの石には、どこから贈られたものであるのか、刻字されています。会は、すべてを書き写し、調査した成果を『新編石の証言「八紘一字」の塔 平和の塔の真実』（鉱脈社、二〇一五年八月）として刊行しました。目の前にあるものを細かく読み、記録する。文学研究に通じるものを感じます。他の負の遺産を考える際にも、やはり細かく読むことが必要とされるのではないのでしょうか。その作業を通して、意見の対立を超えた議論につながるように思います。「八紘一字」の塔を眺めながら、そのようなことを考えています。（茶園梨加）

国際会議 核・原爆と表象／文学

—原爆文学の彼方へ—

INTERNATIONAL CONFERENCE:
NUCLEAR TECHNOLOGY AND ITS LITERARY REPRESENTATIONS
—BEYOND ATOMIC BOMB LITERATURE—

2015.12.12 [SAT]・13 [SUN]

九州大学西新プラザ大会議室

(福岡市早良区西新2-16-23)

タイムテーブル TIMETABLE

12.12 [SAT]

- ▶ 13:00
開会の辞(趣旨説明) 川口 隆行(広島大学)
- ▶ 13:20 - 16:00
【セッション1 移動する原爆—文学】
司会/中谷 いずみ(奈良教育大学)
- 島村 輝(フェリス学院大学)
投下する『蘭』(記憶) —2015年・日本からの再検証
- 齋藤 一(筑波大学)
核時代の英米文学者
—Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (1946)の
日本語訳(1950)について
- 松永 京子(神戸外国語大学)
ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』
—大田 洋子と『ネイティブ・ブギ』
- コメントナー/吉田 裕(東京理科大学) 中野 和典(福岡大学)
- ▶ 16:20 - 17:50
【特別講演】
司会/李 文原(筑波大学)
- シャーマン・ラポガン(ハルビン)
大海に浮かぶ夢と放射能の島々
- コメントナー/高野 晋昭(佐賀大学)

12.13 [SUN]

- ▶ 10:00 - 12:40
【セッション2 原爆を視る】
司会/柳田 剛(宮崎公立大学)
- 野坂 昭博(山口大学)
原爆写真というメディアと詩
- 紅野 謙介(日本大学)
『モノクロ』と闇のありか
—戦後日本歴史における「原爆」の用法
- マイケル・ゴーマン(広島県立大学)
『核の不安』から『核の無関心』へ
—アメリカのニューラルチャーにおける核のイメージの変容
- コメントナー/岡村 幸(原爆の民九本美術館)
監修 志(早稲田大学博物館特別招聘研究員)
- ▶ 14:00 - 16:40
【セッション3 冷戦文化と核】
司会/川口 隆行(広島大学)
- アン・シェリア(オーストラリア)
核と自由 —1960 - 1970年代の日本における公民権/反戦/反核運動
- 山本 昭彦(神戸外国語大学)
『核のない平和』と『核による平和』 —冷戦期日本の平和論と安全保障論から
- 林 泰勲(福岡県立大学校人文学部研究員P.D.)
コア核マフィアの始まり —雑誌『学生科学』(1965)を中心に
- コメントナー/市川 直(広島大学) 高 美穂(日本大学)
- ▶ 16:40
閉会の辞(会議総括) 長野 秀樹
(原爆文学研究会世話人代表 長崎純心大学)

お問い合わせ ▶ koharu12@hiroshima-u.ac.jp (広島大学・川口隆行)
お申し込み ▶ nakanok@fukuoka-u.ac.jp (福岡大学・中野和典)

第四九回 原爆文学研究会報告

二〇一五年十二月二日(土)、二三日(日)に、九州大学西新プラザで、第四九回研究会「国際会議 核・原爆と表象／文学—原爆文学の彼方へ—」を開催しました。この会議は、科学研究費(基盤B)「核・原爆と表象／文学に関する総合的研究」(代表 川口隆行)が主催し、日本文学・英米文学・映画・美術・科学史の研究者や、アメリカ、韓国、台湾の研究者が登壇し、報告・コメントを行いました。初日は「セッション1 移動する原爆—文学」と、シャーマン・ラポガン氏による特別講演「大海に浮かぶ夢と放射能の島々」があり、二日目は「セッション2 原爆を視る」と、「セッション3 冷戦文化と核」があり、様々な問題提起がなされました。一日目、二日目ともに七〇名以上の参加があり、盛会のうちを終りました。会の詳しい内容は「原爆文学研究」一五号に掲載予定です。本会報では各セッションと特別講演についての印象記を掲載します。

セッション1 「移動する原爆—文学」印象記

柳瀬 善治

最初の登壇者の島村輝氏の報告「投下する」側の「記憶」—二〇一五年・日本からの再検証」は新井卓「49pumpkins」を分析し、B-25戦闘機から49個のカボチャを落下させる様子を撮影した同作品を、原爆投下をめぐる視点と感覚の非対称性を浮き彫りにしたものと捉え、次に投下側の罪の意識を描いたクロード・イーザリー／ギュンター・アンドレス「ヒロシマわが罪と罰」と堀田善衛「審判」との接続から「想像力」のもたらす「表現」や「表象」が、そうした「リアル」を凌駕するリアリティをもって、受容者の心を揺さぶるという「可能性」を見出そうとした。

二番目の登壇者である齋藤一氏は「核時代の英文学者—Hermann Hagedorn, *The Bomb that Fell on America* (1946)の日本語訳(1950)について」と題し、ハゲドーンの原爆投下を批判した詩作品の背後における日米のネットワーク、ハゲドーンが関与していたMRA(道徳再武装)と日本側の受容の問題、GHQの文化政策とのかかわりについて考察した。三番目の登壇者の松永京子氏は「ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』—大田洋子と『ネイティブ・サヴァイヴァンス』と題し、大田の『夕風の街と人』に『平和』の脱構築の可能性を読み、その影響を受けたヴィゼナーの作品にも同様の戦略を見た上で、『ヒロシマ・ブギ』の結末が先住民の言説に回収されたことの是非を問うた。

吉田裕氏と中野和典氏によるコメントとその後の質疑で、新井作品の「馬鹿馬鹿しさ」や『ヒロシマ・ブギ』のネイティブ同士(アイヌとネイティブアメリカン)が出会うという設定がさらに「非対称性」と「被害者性」を屈折させ複雑にさせること、福原麟太郎のような「沈黙」した英文学者の存在の差異が確認された。

視点の「非対称性」・平和の欺瞞性をそのまま浮き彫りにすること

は重要ではあるが、それと「罪の意識」とセットで想定される「裁き」の視座——複数性・非決定性と審判は両立するのか——をどのように設定させるのか、加害者／被害者の「沈黙」をどのように表象し得るのかは、原爆文学を検討する際の巨大な課題の一つであろう。



セッション1



特別講演

シヤラマン・ラポガン氏の特別講演を聴いて

水溜 真由美

恥ずかしながら、シヤマン・ラポガン氏の特別講演の印象記の執筆を依頼されたとき、台湾の蘭嶼に住むタオ族というラポガン氏の属性と講演のタイトルが頭の中で上手く結びつかなかった。その後、タオ族が台湾で唯一島嶼部に居住する先住民族であること、蘭嶼には台湾本島で原子力発電所が稼働し始めてまもなく核廃棄物の貯蔵施設が設置されたことを知り、私は「ここでもか」と思った。台湾に限らず、マイノリティが居住する「辺境」に核廃棄物が貯蔵されたり、核実験が行われたり、軍事基地などの迷惑施設がおかれたりする状況は世界各地に見られる。鉄則とさえ言い得るほどに。

だが、これらはラポガン氏にとって自明のことではなかった。本講演でラポガン氏は、一九五七年に蘭嶼に生まれてから今日までの六〇年近い人生をふり返ったが、彼の子どもの時代の台湾には、原発も、核廃棄物も、先住民の権利という発想も存在していなかった。ラポガン氏は、自ら先住民としての権利意識を獲得し、核廃棄物の貯蔵施設が蘭嶼におかれたことの意味を認識し、反対運動を組織した。それを可能としたのは、国立師範大学に入学して「御用教師」となる人生を直観的に回避したという独立心と、類い希な知力、行動力だろう。その過程で、海外のマイノリティとの結びつきはラポガン氏に大きな力を与えたようだ。

蘭嶼における反対運動の現状は、ラポガン氏が自嘲的に「劇場のピエロの如き振る舞い」と述べていることからして、相当厳しいのであろう。他方で、ラポガン氏は、自ら船を作り、航海し、魚を捕る生活を通じて、古くから海と共に生きてきたタオ族の伝統につながる喜びと、比類のない「海洋文学作家」としての自負を語った。ラポガン氏の中で、これらの活動と反核運動は海を守るという一点で強く結びついているのであろう。

その「出来事」を想起するために

——「セッション2 原爆を視る」に参加して

深津 謙一郎

「セッション2 原爆を視る」では、野坂昭雄さん、紅野謙介さん、マイケル・ゴーマンさんのお三方による基調発表のあと、コメントーターの岡村幸宣さん、鷺谷花さんを加えた全体討議が行われた。

このうち、野坂さんは、山端庸介の原爆写真の受容過程、すなわちそれが物語化され、ある歴史を構築していく傍らで、写真に写し込まれた「出来事そのもの」から、私たちが遠ざけられる危険性を問題にする。そのうえで、人間の無意識を写し取るカメラ（機械の眼）、そしてそこから類推される〈詩〉の可能性について言及し、それらを梃子にして、歴史として物語化された「一般的関心」（ストゥディウム）を脱中心化するような「出来事そのもの」との出会いが構想される。

続く紅野さんの発表も、野坂さん同様、表象されたものの彼方に想起されるような「出来事そのもの」を問題化しようとするものだった。具体的には、映画『仁義なき戦い』の冒頭シーンで用いられた広島原爆の映像が、米軍によって撮影された長崎原爆の映像で「代用」されていたという事実を糸口にして、「代用」という観点から、表象不可能なものを歴史の語りを組み入れようとするときに生じる諸々の困難が指摘された。

ゴーマンさんは、アメリカのポピュラー・カルチャーにおける核イメージの変遷について報告した。アメリカ社会では、冷戦初期から現代へ時代が下るにつれ「精神的無感覚」というかたちの核否定（否認）が定着し、その結果核イメージも、核に対する現実的懸念とは乖離したところで消費される（しかも現在ではやや時代遅れの）「モチーフ」の一つでしかなくなつた、という主旨であった。

その後の全体討議でも刺戟的な意見が交わされたが、この日のセッションで最も印象に残つたのは、「代用」に関する紅野さんの問題提起である。『仁義なき戦い』冒頭場面の「代用」は、私自身（恥ずかしい話だが）今回の指摘で初めて知った。そのことに、これまで無頓着だったということとは、私もまた、「出来事そのもの」よりも、記号化された（ゴーマンさんの言う）「モチーフ」だけを消費していたということだろうか（山端の原爆写真が広島の惨禍を写したのものとして「代用」されるのも同じ理屈ではないか）。かといって、「代用」を否定すればそれだけでよいという問題はもちろんなく（「代用」を排除した先に一体何がもたらされるだろうか？）、だとすれば、紅野さんが言う「出来事そのもの」を彼方に想起させるような豊かな「代用」の物語はどのように可能だろうか、という問題が浮上ってくる。様々な宿題を貰った気がした。



セッション2

思想／言説／文化を受け渡すということ

——「セッション3」冷戦文化と核」報告を受けて

堀本 嘉子

アン・シエリフ氏は、冷戦期にベ平連が開催したティーチ・インにおいて世界的市民運動における共通の概念として「人権」が見出される様子を報告した。人種差別問題とベトナム反戦運動の深い関わりについて気づいたフェザーストンが、日本におけるティーチ・インでそれまでは見えていなかったアメリカにおける黒人差別を見えるように伝えたことで世界と「連帯」を強めていく様子は大変興味深く、当時の運動の熱を想像した。

山本昭宏氏は、一九六〇年代における政治学者たちの言説を報告した。雑誌『世界』や『中央公論』で展開された「平和論」と「安全保障論」におけるそれぞれの「平和」のあり方について考察を加えた発表であった。パワーポイントで行われた発表は、絶妙な間と会員関連の小ネタを交え会場の笑いを誘いつつ進められた。「平和論」が「安全保障論」に負けた（かのように見える）状況が生まれ、現実には「現実主義」の「安全保障論」が生き残り続けた結果の契機として、六〇年安保の成立と中国の核武装を挙げていたが、発表媒体の特性についても指摘と考察があると良いように感じた。

イム・テフン（林太勲）氏は、原子力神話を植え付けた代表的メデアであった雑誌『学生科学』について報告した。月刊誌であった『学生科学』は中高生が主な読者層であり、核兵器への恐怖と原子力技術の平和利用についての記事を両方とも載せていた。『学生科学』におけるこの典型的なフレームづくりこそが、コリアン核マフィアの誕生の原点であったという指摘には刺激を受けた。

冷戦期におけるアメリカ・日本・韓国それぞれの場で交わされた先人

たちの議論や雑誌に残された言説の報告と議論。一九八七年に生まれた私にとって、冷戦文化が創り出されていくその光景をはっきりとイメージすることは難しい。三者の報告を聴取することで知る喜びを感じると同時に、終わりのない思考の入り口に誘われる自分自身を自覚する時間であった。また、学生が関わった運動や学生を対象とした雑誌が取り上げられた報告は、教壇に立つ自身の日常にも時を経て直接関わるような感覚を持つものであった。



セッション3



閉会の辞



開会の辞

彙報

第四九回 原爆文学研究会

国際会議 核・原爆と表象／文学——原爆文学の彼方へ——

○日時 二〇一五年一月二日(土)、三日(日)

○会場 九州大学西新プラザ大会議室

○主催 科学研究費(基盤B)「核・原爆と表象／文学に関する総合的研究」(代表 川口隆行)

【一日目】

○開会の辞

川口 隆行

○セッション1 移動する原爆—文学

司会 中谷いずみ

報告1 「投下する」側の「記憶」——2015年・日本からの再検証

島村 輝

報告2 核時代の英米文学者——Hermann Hagedorn, The Bomb that Fell on America(1946)の日本語訳(1950)

について

齋藤 一

報告3 ジェラルド・ウィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』

——大田洋子と「ネイティブ・サヴァイヴァンス」

松永 京子

○特別講演 コメンテーター 吉田 裕／中野 和典

大海に浮かぶ夢と放射能の島々

シャーマン・ラポガン

【二日目】

○セッション2 原爆を視る

司会 楠田 剛士

報告1 原爆写真というメディアと〈詩〉

野坂 昭雄

報告2 「キノコ雲」と隔たりのある眼差し——戦後日

本映画史における〈原爆〉の利用法

紅野 謙介

報告3 「核の不安」から「核の無関心」へ——アメリカ

のポピュラーカルチャーにおける核のイメージの変容

マイケル・ゴーマン

コメンテーター 岡村 幸宣／鷺谷 花

○セッション3 冷戦文化と核

報告1 核と自由——1960-1970年代の日米における公

司会 川口 隆行

報告2 〈核のない平和〉と〈核による平和〉

——冷戦期日本の平和論と安全保障論から

報告3 コリア核マフィアの始まり

——雑誌『学生科学』(1965)を中心に

市川 浩／高 榮蘭

○閉会の辞

長野 秀樹

編集後記

国際会議の内容豊富な報告を聞き、恥ずかしながら未読のもの・未視聴のものが多くあることを感じました。会議に限らず積ん読だったアレクシエービッチの『チエルノブイリの祈り』もノーベル賞決定後によりやく読んだ次第です。今度は三島由紀夫の『美しい星』が映画化されるそう、読むもの・観るものは尽きません。今回の研究会は五月一四・一五日に山口大学で開催しますが、書評会と総会を行います。書評対象は岡村幸宣氏の『《原爆の図》全国巡回』と村上陽子氏の『出来事の残響』です。五〇回目の会に、みなさま奮ってご参加下さい。(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四—〇一八〇 福岡市城南区七隈八一—一九一—

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) / e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>